

研究論文

特別支援学校教育実習における学生の学びの現状と課題

—事後指導における自己評価と実習校教員による成績評価からの検討—

教育学部教育学科 吉川 明守

抄録

本研究は、特別支援学校教育実習での学びの向上に資するため、本学学生による2016年度と同教育実習における学びの現状と課題を明らかにすることを目的とした。実習校側の成績評価と「振り返り」の授業の中で作成される学生の自己評価内容等を量的分析した。

その結果、特別支援学校教育実習においては、総じて学びの多い現状にあることが明らかになった。あわせて卒業年次に行われる最終実習特有の自己課題の存在も確認された。また、より学びある実習にするための今後の課題としては、基礎免実習事後指導や教職実践演習との授業間連携の在り方や特別支援教育に関する専門科目の履修の在り方などがあげられた。

キーワード

特別支援学校教育実習・自己評価

1 研究の背景

特別支援学校教育実習（以下「特支教育実習」と記す）は、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校の教諭免許状にかかる教育実習（以下「基礎免実習」と記す）を終了した者を対象に2週間（10日以上）実施される。この教育実習は、佛教大学（以下「本学」と記す）の教員養成の基本的な考え方¹⁾、すなわち「（1）幅広い教養と豊かな人間性を有し、子どもの内面を深く理解して、その成長に寄り添い、自立を支援できる教員を養成する。（2）教職及び教科・領域に関する理論知と実践知を有し、教育現場において高い指導力（創造と問題解決）を発揮できる教員を養成する。（3）教職員や保護者、地域社会との豊かな関係の中で、協働して教育活動ができる教員を養成する。」に基づき「特別支援学校における教育の実際（障害のある児童生徒の実態・教育活動等）を経験し、自身の『障害観・子ども観・教育観』を見直したり深めたりすることを通して、障害のある児童生徒に対する教育実践力を培う。」ことを「授業の目的・ねらい」として実施される²⁾。そして本学においては、特支教育実習の学びを効果的にするために「教育実習に臨む心構えや具体的な授業の進め方、児童及び生徒の指導の在り方等について理解する。」ことを「授業の目的・ねらい」とした特別支援教育実習研究（以下「特

支教育実習研究」と記す) という科目が開設されている。この特支教育実習研究は、特支教育実習実施前に「全員が質の高い教育実習を行えるよう、その心構え、指導技術、知識等を身につける。」ことを到達目標として行われる事前指導と特支教育実習実施後に「特支教育実習をしっかりと振り返り、教員を目指すための今後の学びについて自己確認する。」ことを到達目標として行われる事後指導が用意されている²⁾。この事後指導における学生の自己確認情報は、特支教育実習に限らず教育実習全般にかかる授業改善に資するものとして、これを対象とした古屋野³⁾ 柴田ら⁴⁾ 八木ら⁵⁾ 村松⁶⁾ の研究が行われてきている。しかしながら教育実習の中でも最終実習に位置づけられている特支教育実習においては、この種の研究はほとんど見当たらない。「基礎免実習」を既に終了していることや就職を間近にした卒業年次の実施でもあることから、先行研究と異なり特支教育実習特有の傾向が存在することも大いに考えられる。したがって、特支教育実習研究事後指導における学生の自己確認情報から、特支教育実習における学生の学びの現状と自己課題を把握することは、以後の特支教育実習研究の内容をより有意義なものとするために意義深いものと考えられる。ただし、ここで得られる自己確認情報（自己成績評価や自己課題認識）が養成段階の学生であるがゆえに、適切性に欠けることも懸念される。したがって、信頼性や妥当性を高めるために特別支援学校教育実習受け入れ校（以下「実習校」と記す）の成績評価とあわせて分析検討していく方法を用いる。

2 方法

本研究は、実習校教員によって評定された実習生の成績評価とその成績評価と同様の着眼点で実施する実習生の自己成績評価との比較から実習生の学びの現状について把握を図る第一研究と、特支教育実習研究の事後指導で実施された「振り返りシート」の記述内容を分析し、実習生の学びと自己課題について把握を図る第二研究から構成される。

1) 第一研究

(1) 調査対象

2016年6月～12月までに特別支援学校で教育実習を行った本学4回生80名のうち、D県で特支教育実習を行った14名を除く66名の実習生の自己成績評価と、40校の実習校教員による実習生66名分の成績評価を対象とした。実習校設置府県と実習校数及び実習生数等の一覧は、Table 1に示す。なお、D県を調査対象から除外したのは、成績評価票が本学で用意したものとは異なるものを使用していることが理由である。

Table 1 実習校設置府県と実習校数及び実習生数

実習校設置府県	A府	B府	C県	D県	E県	F県	G県	H県	I県	J県	合計
実習校数 (単位：校)	16	11	5	4	3	1	1	1	1	1	44
実習生数 (単位：人)	33	16	8	14	4	1	1	1	1	1	80

備考：D県の実習校及び実習生については、本研究の対象から除いている。

(2) 調査内容

本学においては、実習校に対して実習生における特支教育実習の成績を、教育実習成績報告票（特別支援学校）を用いて、原則【出席状況】【事項別評価】【総合評価】の3カテゴリーで評定を依頼している。本研究では実習生の学びの現状と自己課題を把握することを目的としているため、【事項別評価】にある「区分1：学習指導」に関する4事項、すなわち①基礎学力・知識、②教材研究・計画、③自立活動への理解と指導、④指導態度・技術、「区分2：生活指導」に関する3事項、すなわち⑤個別・集団指導、⑥児童・生徒理解、⑦指導の配慮・技術、「区分3：実習指導」に関する4事項、すなわち⑧勤務態度・熱意、⑨事務・実務能力、⑩レポートなどの提出物、⑪教育的視野の計3区分11事項についての評定を実習校教員に対する調査内容（以下「実習校評価」と記す）とした。

また、実習生においては、特支教育実習研究の事後指導における授業の中で、自身の特支教育実習に対する自己評価という形で実施された自己成績評価シートの内容とした。この内容は実習校に成績評定する際に使用依頼している前述の教育実習成績報告票（特別支援学校）（以下「自己成績評価」と記す）の【事項別評価】にある3区分11事項の内容と同様とした。（教育実習成績報告票（特別支援学校）は資料1として付記した）。

なお、11事項における成績評価判定の主な着眼点は、次の内容で依頼している。

- ① 基礎学力・知識（区分1-1）：ことばが明瞭で、文字が正しく書け、基礎的な知識・学力を有しているか、など。
- ② 教材研究・計画（区分1-2）：教材・教具の研究や準備・計画に努力し、その提示や指導の方法に創意工夫をこらそうとしたか、など。
- ③ 自立活動への理解と指導（区分1-3）：自立活動の意義を理解し、いろいろな場面で配慮して、指導しようとしたか、など。
- ④ 指導態度・技術（区分1-4）：個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、細心に対応し、到達目標を明らかにして、弾力的に指導しようと配慮・工夫したか、など。
- ⑤ 個別・集団指導（区分2-1）：個々の児童・生徒および学級集団の特質に注目し、全学校生活を通じて個別・集団指導に熱意を示し、努力したか、など。
- ⑥ 児童・生徒理解（区分2-2）：児童・生徒の中にとけこみ、個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、願い、要求・喜びなどをよく理解しようとしたか、など。
- ⑦ 指導の配慮・技術（区分2-3）：児童・生徒に具体的な経験の場を設定し、集団活動への参加を促進したか、など。
- ⑧ 勤務態度・熱意（区分3-1）：勤務態度が良く、教育的熱意を見られたか、など。
- ⑨ 事務・実務能力（区分3-2）：学級経営上の事務処理などがうまくできたか、など。
- ⑩ レポートなどの提出物（区分3-3）：レポート・実習簿・研究物・書類などを主題に即時的確に記述し、期限を守って提出したか、など。

- ⑪ 教育的視野（区分3-4）：児童・生徒の実態に基づき、職場・家庭・地域などの様子を理解しようとし、自主的・協力的に教育を進めようとしたか、など。

（3）分析方法

3区分11事項の内容は「A：（優）非常に満足できる内容であった」（以下、「A評価」と記す）、「B：（良）満足できる内容であった」（以下「B評価」と記す）、「C：（可）いま少しの努力することが必要な内容であった」（以下「C評価」と記す）、「D：（不可）全く満足できる状況になかった」（以下「D評価」と記す）の4段階でそれぞれ評価されている。この3区分11事項の評価について、実習校評価と実習生の自己成績評価を段階別に比較して分析する方法を用いた。

また、3区分11事項における自己成績評価と実習校評価の差は、柴田ら⁴⁾や八木⁵⁾の方法に準じて、各評価段階をA評価が4点、B評価が3点、C評価が2点、D評価が1点と点数換算し、統計分析する。

（4）結果

Table 2は、3区分11事項における自己成績評価と実習校評価の評定結果を示したものである。このように「満足できる内容である」と評定された得点3を下回る平均値であったものは、自己成績評価における区分1-1の2.82 (SD=0.65)、自己成績評価における区分1-3の2.95 (SD=0.69)、自己成績評価における区分1-4の2.92 (SD=0.54) 及び自己成績評価における区分2-3の2.82 (SD=0.63) の4事項であった。実習校評価については、11事項すべてにおいて、平均値は「満足できる内容である」と評定された得点3を上回っていた。自己成績評価の最高平均値であった事項は、区分2-2の3.59 (SD=0.56) と区分3-1の3.59 (SD=0.53) であり、最小平均値であった事項は、区分1-1の2.82 (SD=0.65) と区分2-3の2.82 (SD=0.63) であった。実習校評価の最高平均値であった事項は、区分3-1の3.82 (SD=0.43) であり、最小平均値であった事項は、区分2-3の3.17 (SD=0.52) であった。自己成績評価と実習校評価を比較すると、11事項のうち区分2-2において自己成績評価平均値3.59 (SD=0.56) が実習校評価平均値3.52 (SD=0.61) を上回っているのみで、後の10事項全てにおいて、実習校評価が自己成績評価を上回っていた。この結果は、各事項別の双方の得点合計の差においても明らかであった (Fig.1参照)。そして t 検定においても区分1-1と区分1-4及び区分2-3と区分3-1の4事項が $p<0.001$ 、区分1-2の1事項が $p<0.01$ 、区分1-3と区分3-3の2事項が $p<0.05$ の計7事項で自己成績評価よりも実習校評価が有意に高い値を示していた。

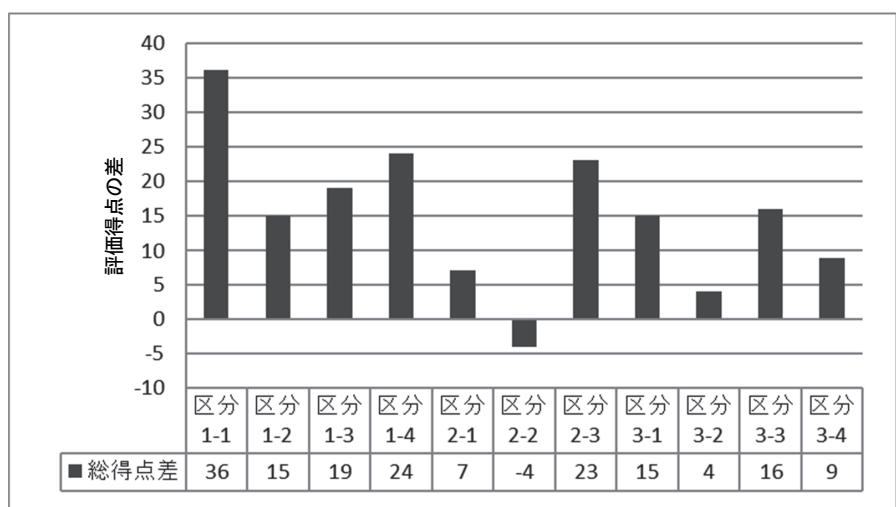


Fig.1 各事項における自己成績評価得点と実習校評価得点との差

Table 2 評価事項別における実習校評価と自己成績評価

評価事項	評価別	A評価(4点)		B評価(3点)		C評価(2点)		D評価(1点)		未記入	総得点	得点差	平均値	標準偏差(SD)	t値	有意確率(両側)
		人数	得点	人数	得点	人数	得点	人数	得点							
区分1-1	自己成績評価	7	28	42	126	15	30	2	2	0	186	36	2.82	0.65	-5.122	0.00***
	実習校評価	27	108	36	108	3	6	0	0	0	222		3.36	0.57		
区分1-2	自己成績評価	29	116	26	94	9	18	0	0	0	218	15	3.30	0.70	-2.647	0.01**
	実習校評価	39	156	24	72	2	4	1	1	0	233		3.53	0.64		
区分1-3	自己成績評価	7	56	47	102	12	34	0	0	1	192	19	2.95	0.69	-2.114	0.04*
	実習校評価	17	88	45	135	4	8	0	0	0	211		3.20	0.53		
区分1-4	自己成績評価	7	28	47	141	12	24	0	0	0	193	24	2.92	0.54	-3.702	0.00***
	実習校評価	24	96	37	111	5	10	0	0	0	217		3.29	0.60		
区分2-1	自己成績評価	22	88	38	114	6	12	0	0	0	214	7	3.24	0.61	-1.044	0.30
	実習校評価	27	108	35	105	4	8	0	0	0	221		3.35	0.59		
区分2-2	自己成績評価	40	160	24	72	2	4	0	0	0	236	-4	3.59	0.56	0.728	0.47
	実習校評価	38	152	24	72	4	8	0	0	0	232		3.52	0.61		
区分2-3	自己成績評価	8	32	37	111	19	38	0	0	2	183	23	2.82	0.63	-3.522	0.00***
	実習校評価	15	60	46	138	4	8	0	0	1	206		3.17	0.52		
区分3-1	自己成績評価	40	160	25	75	1	2	0	0	0	237	15	3.59	0.53	-3.359	0.00***
	実習校評価	55	220	10	30	1	2	0	0	0	252		3.82	0.43		
区分3-2	自己成績評価	19	75	39	117	6	12	1	1	1	206	4	3.17	0.65	-0.184	0.85
	実習校評価	15	60	48	114	3	6	0	0	0	210		3.18	0.49		
区分3-3	自己成績評価	33	132	25	75	6	12	2	2	0	221	16	3.35	0.77	-2.389	0.02*
	実習校評価	43	172	20	60	2	4	1	1	0	237		3.59	0.63		
区分3-4	自己成績評価	19	76	33	99	14	28	0	0	0	203	9	3.08	0.71	-1.350	0.18
	実習校評価	18	72	44	132	4	8	0	0	0	210		3.21	0.54		

備考:得点差は実習校評価総得点-自己成績評価総得点で算出

(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$)

A評価からC評価までの評定4段階の人数はTable 2に示した通りである。この結果について、評定が「非常に満足できる内容であった」A評価と「満足できる内容であった」B評価とに属する者を「高成績者」とし、「いま少しの努力することが必要な内容であった」C評価と「全く満足できる状況になかった」D評価とに属する者を「低成績者」とすると、その割合は、Fig. 2とFig. 3に示す通り、自己成績評価においては、最低値(区分2-3)の68.2%から最高値(区分3-1)の98.5%の範囲内で、高成績者の割合が高く、実習校評価においては、最低値(区分1-4)の92.5%から最高値(区分3-1)の98.5%の範囲内で、高成績者の割合が高かった。

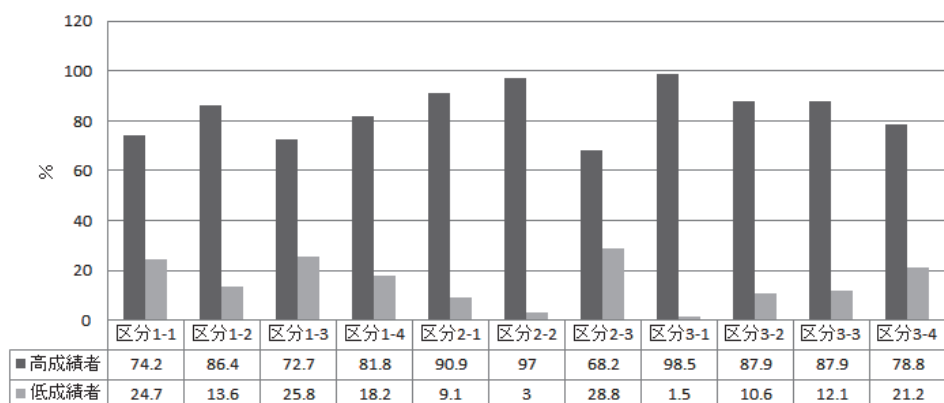


Fig. 2 各事項における自己成績評価の成績別割合

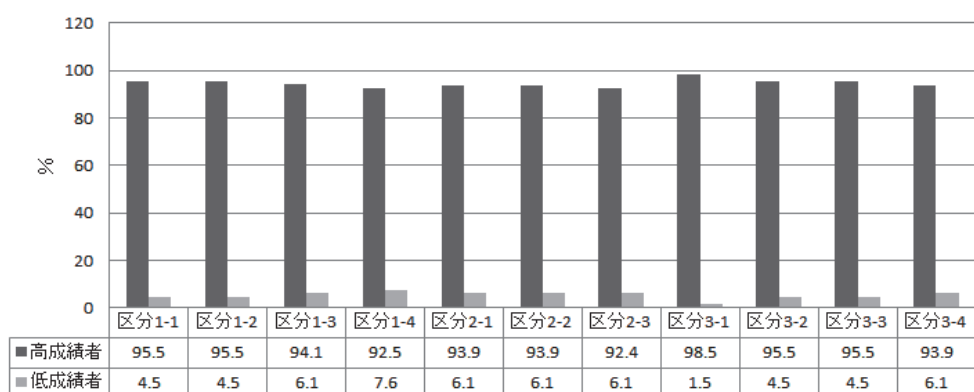


Fig. 3 各事項における実習校評価の成績別割合

(5) 考察

① 自己成績評価の結果から考察されること

「満足できる内容である」と評定された得点3を下回る平均値であった自己成績評価は、基礎学力・知識（区分1-1）、自立活動への理解と指導（区分1-3）、指導態度・技術（区分1-4）、指導の配慮・技術（区分2-3）の4事項であった。また、「満足できる状態にない」と評定される「低成績者」の割合は、基礎学力・知識（区分1-1）で24.7%、自立活動への理解と指導（区分1-3）で25.8%、指導の配慮・技術（区分2-3）で28.8%と4名に1名の割合で「満足できる状態」まで学習が深まったとは評価できないと評定していた。また、指導態度・技術（区分1-4）にかかる低成績者は18.2%であり、この事項においても5～6名

に対して1名の割合で「満足できる状態」まで学習が深まったとは評価できないと評定していた。これらのことから実習生は、2週間（10日以上）の特支教育実習で学習指導に区分された基礎学力・知識（区分1-1）、自立活動への理解と指導（区分1-3）、指導態度・技術（区分1-4）の3事項と生活指導に区分された指導の配慮・技術（区分2-3）の1事項の計4事項の内容において、4～6名に対して1名の割合で、課題として積み残した内容があると振り返っていることが推察された。

「満足できる内容である」と評定された得点3を上回る平均値であった7事項のうち、児童・生徒理解（区分2-2）と勤務態度・熱意（区分3-1）の2事項については、平均値が3.5を超える高い評価で評定されていた。さらに「満足できる状態である」と評定される「高成績者」の割合は、前述の2事項において、児童・生徒理解（区分2-2）が97%、勤務態度・熱意（区分3-1）が98.5%とほとんどの者が「満足できる内容である」と評定していた。これらのことから実習生が、2週間（10日以上）の特支教育実習で、生活指導に区分された児童・生徒理解（区分2-2）、実習態度に区分された勤務態度・熱意（区分3-1）の内容において、ほとんどの者が、期待した目標まで学習を深めることができたと振り返っていることが推察された。

八木⁵⁾は、「教育実習における中間自己評価の有効性」の研究において、中間自己評価によって「児童理解」や「勤務態度・熱意」に関する事項の重要性に気づき、その後の取り組みによって、自己評価・実習校評価も高評価となったことを報告している。このことは、基礎免実習の評価を中間自己評価に相当するものとして考察すると、基礎免実習事後指導における振り返りの重要性を示唆していると考ええる。特支教育実習研究事前指導においては、基礎免実習の振り返りの発表を授業の導入教材としているが、このことも特支教育実習における学びを深めることに有効に作用していると推測される。

② 実習校評価の結果から考察されること

自己成績評価と異なり11事項すべての事項において「満足できる内容である」と評定される得点3を下回る平均値はなかった。特に教材研究・計画（区分1-2）、児童・生徒理解（区分2-2）、勤務態度・熱意（区分3-1）、レポートなどの提出物（区分3-3）の4事項については、平均値が3.5を超える高い評価で評定されていた。また、「満足できる状態である」と評定される「高成績者」の割合は、全ての事項において90%を超える値を示していた。これらのことから実習校の教員は、2週間（10日以上）の特支教育実習において、ほとんどの実習生が「満足できる学び」を行うことができたと考えていることが推察された。松本ら⁷⁾は、小学校教育実習における実習校評価と実習生の自己評価を検討し、小学校教育実習において、実習校評価が自己評価よりも総じて高い評定であったことを報告し、それは事前に幼稚園実習や保育実習などを経験していることが大きいと考察している。本研究においては、既に基礎免実習を終了している者を対象とした特支教育実習であるので、結果は基礎免実習や大学における実習研究等での学びの結果が大いに影響していると考えられる。

③ 自己成績評価と実習校評価の差から考察されること

自己成績評価と実習校評価における得点の総和の差は、児童・生徒理解（区分2-2）の1事項以外の10事項において、実習校評価の方が自己成績評価よりも高い値を示していた。また、自己成績評価で期待した内容まで学びを深められなかったことが示唆された4事項、すなわち学習指導に区分された基礎学力・知識（区分1-1）、自立活動への理解と指導（区分1-3）、指導態度・技術（区分1-4）及び生活指導に区分された指導の配慮・技術（区分2-3）においても、実習校の評価が0.1%～5%水準で有意に高い値を示し、実習生の学びが「満足できる状態」と高い評定をしていた。松本ら⁷⁾の研究においては、授業構成に係る内容について、自己成績評価も実習校評価も低い評点であり、学生の課題となるとの指摘がある。しかし、本研究の結果においては、実習校評価は高い水準の評定であり、また実習生の自己成績評価よりも有意に高かった。この評価の相違は、実習校評価は当然のことながら依頼された実習期間中のみの評価であり、また養成途上にある学生という観点で評定するが、特支教育実習生は、卒業を間近にしていることで、教職についた自分を想定して評定すると考えられ、このことによる影響もあると推測される。第二研究の「振り返りシート」で自己評価の詳細情報を得ることができるので、その分析結果とあわせて検討するとより適切な要因を推定できると考える。

2) 第二研究

(1) 調査対象

第一研究の結果とへの対応の必要性から、2016年6月～12月までに特別支援学校で教育実習を行った本学4年生80名のうち、D県で特支教育実習を行った者の14名を除く66名の実習生（第一研究と同一者）の自己評価を対象とした。

(2) 調査内容

2016年12月における特支教育実習研究の事後指導で実施された教育実習研究(特別支援学校)レポートである通称「振り返りシート（A4版用紙1枚で裏面使用可）」の内容とした。このレポートで求められた主な内容は、以下の3点である。

- ① 設題-1：教育実習を振り返って、教育実習での自身の学習の成果と課題について記せ。（自由記述）
- ② 設題-2：「①の課題」を克服するためにどのようなことを実施しようと考えているか（あるいは実施しているか）を記せ。（自由記述）
- ③ 設題-3：今年度の特支教育実習研究の事前指導で行われた内容以外で、取り上げてもらいたいことについて記せ（「ある」「なし」に該当するところに○印をつける。「ある」と回答した人は具体的内容を記述する）。（教育実習（特別支援学校）自己評価票は資料2として付記した）。

(3) 分析方法

「振り返りシート」記載の設題-1の内容については、第一研究で使用した教育実習成績報告票（特別支援学校）にある事項別評価の11事項の内容に準じて分類し分析する。11事項の内容は、設題との関連で主な着眼点の内容を以下のように到達目標用の表現に修正して使用した。

- ① 基礎学力・知識（区分1-1a）：[主な着眼点]ことばが明瞭で、文字が正しく書け、基礎的な知識・学力を修得することができたか。
- ② 教材研究・計画（区分1-2a）：[主な着眼点]教材・教具の研究や準備・計画に努力し、その提示や指導の方法に創意工夫をすることができたか。
- ③ 自立活動への理解と指導（区分1-3a）：[主な着眼点]自立活動の意義を理解し、いろいろな場面で配慮して、指導することができたか。
- ④ 指導態度・技術（区分1-4a）：[主な着眼点]個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、細心に対応し、到達目標を明らかにして、弾力的に指導しようと配慮・工夫することができたか。
- ⑤ 個別・集団指導（区分2-1a）：[主な着眼点]個々の児童・生徒および学級集団の特質に注目し、全学校生活を通じて個別・集団指導に熱意を示し、努力することができたか。
- ⑥ 児童・生徒理解（区分2-2a）：[主な着眼点]児童・生徒の中にとけこみ、個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、願い、要求・喜びなどをよく理解しようとすることができたか。
- ⑦ 指導の配慮・技術（区分2-3a）：[主な着眼点]児童・生徒に具体的な経験の場を設定し、集団活動への参加を促進することができたか。
- ⑧ 勤務態度・熱意（区分3-1a）：[主な着眼点]良い勤務態度で、教育的熱意を示すことができたか。
- ⑨ 事務・実務能力（区分3-2a）：[主な着眼点]学級経営上の事務処理など適切に行うことができたか。
- ⑩ レポートなどの提出物（区分3-3a）：[主な着眼点]レポート・実習簿・研究物・書類などを主題に即時的確に記述し、期限を守って提出することができたか。
- ⑪ 教育的視野（区分3-4a）：[主な着眼点]児童・生徒の実態に基づき、職場・家庭・地域などの様子の理解に努め、自主的・協力的に教育を進めることができたか。

また、設題-2と設題-3の内容については、課題や特支教育実習研究の授業内容との関係で分析を行う。

(4) 結果

① 設題-1

Fig. 4は「振り返りシート」による特支教育実習の自己評価の内容を示したものである。

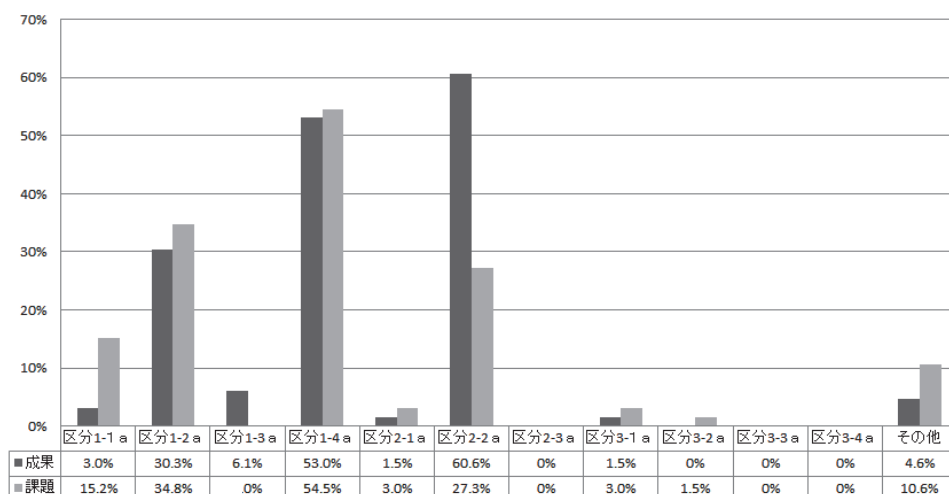


Fig. 4 「振り返りシート」設題-1における事項別割合

学習の成果として記述されていた内容を11事項に分類すると、児童・生徒理解（区分2-2 a）に分類される内容が60.6%と最も高い割合を示し、次いで指導態度・技術（区分1-4 a）に分類される内容が53.3%、教材研究・計画（区分1-2 a）に分類される内容が30.3%、大きな割合を占めていた。他の8事項に分類されるものは、自立活動への理解と指導（区分1-3 a）に分類される内容が6.1%と最大であり、指導の配慮・技術（区分2-3 a）、事務・実務能力（区分3-2 a）、レポートなどの提出物（区分3-3 a）及び教育的視野（区分3-4 a）に分類される内容は全くなかった。

また、自己の課題として記述されていた内容の分類においては、指導態度・技術（区分1-4 a）に分類される内容が54.5%と最も高い割合を示し、次いで教材研究・計画（区分1-2 a）に分類される内容が34.8%、児童・生徒理解（区分2-2 a）に分類される内容が27.3%と高い割合を占めていた。他の8項目においては、基礎学力・知識（区分1-1 a）に分類される内容が15.2%、個別・集団指導（区分2-1 a）と勤務態度・熱意（区分3-1 a）に分類される内容が共に3.0%、事務・実務・能力（区分3-2 a）に分類される内容が1.5%の割合であった。なお、自立活動への理解と指導（区分1-3 a）、指導の配慮・技術（区分2-3 a）、レポートなどの提出物（区分3-3 a）及び教育的視野（区分3-4 a）4事項に分類される内容のものは全くなかった。これら11事項に分類困難であった「他の教職員との連携の仕方」や「適切な自己覚知」はその他の事項としてまとめた。その割合は10.6%であった。

② 設題-2

Table 3は自己の課題としてあげられた前述の8事項（その他を含む）に分類された課題設定

の理由とそれを克服するために記述された内容・方法（以下「克服手段」と記す）及び克服に向けた内容の実行（以下「克服手段実行」と記す）の有無を示したものである。

ここでは10名以上が自己の課題とした基礎学力・知識（区分1-1a）、教材研究・計画（区分1-2a）、指導態度・技術（区分1-4a）、児童・生徒理解（区分2-2a）に分類される内容に絞って結果を示す。

Table 3 学習課題と課題克服のための方法及び課題克服に向けての実行の有無

分類事項	人数	具 体 的 内 容
区分1-1a	10	<p>課題設定 ① 専門用語わからず苦労した（3）＜4.5％、② 医療的ケアに関する知識が乏しい（1）＜1.5％、 理由 ③ 通路にかかわる制度の知識が乏しい（5）＜7.6％、④ 教育課程の知識が乏しい（1）＜1.5％</p> <p>実行克服方法 ① 専門書での学習（1）〔2〕＜30％、② 学校ボランティア（3）〔3〕＜60％、 ③ デイケア施設でのアルバイト（1）＜10％</p>
区分1-2a	23	<p>課題設定 ① 学習の成果をより向上させたい（17）＜25.8％、② 課題として指慣があった（2）＜3.0％、 理由 ③ 教材教具で授業が大きく左右される（3）＜4.5％、④ 将来を見据えた指導計画力が求められる（1）＜1.5％</p> <p>実行克服方法 ① 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト（6）＜26.1％、② 模擬実践〔3〕＜13.0％、 ③ より効果的な方法探求を常に意識する〔8〕＜34.8％、④ いろいろな場面で勉強する〔6〕＜26.1％</p>
区分1-4a	36	<p>課題設定 ① 学習の成果をより発展させたい（17）＜25.8％、② 4月から自信をもって教壇に立つために必要（2）＜3.0％、 理由 ③ 個人差が大いなので、指導（支援）方法の引き出しを多く持つことが必要である（8）＜12.1％ ④ より適切な支援を行いたい（9）＜13.6％、</p> <p>実行克服方法 ① 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト（10）＜44.4％、② 模擬実践〔3〕＜8.3％、 ③ より効果的な方法探求を常に意識する〔12〕＜33.3％、④ いろいろな場面で勉強する〔2〕＜5.6％、 ⑤ 見学〔2〕＜5.6％、⑥ 日常生活で障害児と積極的ににかかわっていく（1）＜2.8％</p>
区分2-1a	2	<p>課題設定 ・学校集団の準備が学校経営の土台となる（2）＜3.0％</p> <p>理由</p> <p>実行克服方法 ① 学校ボランティア・特別支援員のアルバイト（1）＜50％、② より効果的な方法探求を常に意識する〔1〕＜50％</p>
区分2-2a	18	<p>課題設定 ① 学習の成果をより発展させたい（2）＜3.0％、② 児童・生徒理解が指導力の向上に直結する（5）＜7.6％、 理由 ③ 授業づくりに大いに役立つ（6）＜9.1％、④ 支援の基礎となる信頼関係構築に有効である（5）＜7.6％</p> <p>実行克服方法 ① 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト（9）〔1〕＜55.6％、② 卒論で（1）＜5.6％、 ③ 日常生活で障害児と積極的ににかかわっていく（1）〔1〕＜11.1％、④ いろいろな場面で勉強する〔2〕＜11.1％、 ⑤ より効果的な方法探求を常に意識する〔2〕＜11.1％、⑥ 未記入（1）＜5.6％</p>
区分3-1a	2	<p>課題設定 ・授業・積極性が困難を打破する原動力（2）＜3.0％</p> <p>理由</p> <p>実行克服方法 ・学校ボランティア（2）＜100％</p>
区分3-2a	1	<p>課題設定 ・実習校の先生方が書類作りに追われていた（1）＜1.5％</p> <p>理由</p> <p>実行克服方法 ・パソコン操作の学習〔1〕＜100％</p>
その他	7	<p>課題設定 ① 教職員との連携を図る（ITの有効性・業務の困難性を実感した）（5）＜7.6％、 理由 ② 特別支援教育制度を見直したい（1）＜1.5％、③ 実習期間が短い（1）＜1.5％</p> <p>実行克服方法 ① 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト（2）〔2〕＜57.1％、② 学校見学〔1〕＜14.3％、 ③ より効果的な方法探求を常に意識する〔2〕＜28.8％</p>

備考1：人数は、11事項とその他の値に分類される内容であったものでカウントした（複数に分類されるもの有り）。

備考2：具体的内容における課題設定の理由の欄にある（ ）中の数字は、分類された件数であり、＜ 中の割合は、実習生 66名全員に対する割合である。

備考3：具体的内容における実行克服方法の欄にある（ ）中の数字は、既に実行されている件数である。また〔 〕中の数字は、実行するに至っていない件数である。なお＜ 中の割合は、当該事項に分類された実習生の人数に対する割合である。

備考4：具体的内容にある「サポーター」とは、特別支援学校や特別支援学級等における支援員全般を指す。

ア. 課題設定の理由

ア) 基礎学力・知識 (区分 1-1 a)

- (ア) 医療に関わる専門用語(肢体不自由教育・病弱教育)が理解できず苦勞をした(3/66 : 66名の実習生の中3名を表す。4.5%。以下同様に記載する)。
- (イ) 医療的ケアに対する知識に乏しく、連絡事項が理解できずに苦勞をした(1/66:1.5%)。
- (ウ) 進路に関わる制度の知識(高等部)に乏しく苦勞した(5/66 : 7.6%)。
- (エ) 特別な教育課程の編成に関わる知識に乏しく苦勞した(1/66 : 1.5%)。

イ) 教材研究・計画 (区分 1-2 a)

- (ア) 現職の教員との格差を縮めるため学習の成果をより向上させたい(17/66:25.8%)。
- (イ) 実習校の教員から努力事項として指摘された(2/66 : 3.0%)。
- (ウ) 教材教具の良し悪しで授業が大きく左右されることを実感した(3/66 : 4.5%)。
- (エ) 将来を見据えた指導計画力が求められる(1/66 : 1.5%)。

ウ) 指導態度・技術 (区分 1-4 a)

- (ア) 現職の教員との格差を縮めるため学習の成果をより向上させたい(17/66:25.8%)。
- (イ) 4月から自信をもって教壇に立つために必要(2/66 : 3.0%)。
- (ウ) より適切な支援を行いたい(9/66 : 13.6%)。
- (エ) 個人差が大きいので、指導(支援)方法の引き出しを多く持つことが必要である(8/66 : 12.1%)。

エ) 児童・生徒理解 (区分 2-2 a)

- (ア) 現職教員との格差を縮めるため学習の成果をより向上させたい(2/66 : 3.0%)
- (イ) 児童・生徒の理解が指導力の向上に直結することを実感した(5/66 : 7.6%)。
- (ウ) よい授業づくりに大いに役立つことを実感した(6/66 : 9.1%)。
- (エ) 支援の基盤となる信頼関係構築に有効であった(5/66 : 7.6%)。

イ. 克服手段と克服手段の実行

ア) 基礎学力・知識 (区分 1-1 a)

- (ア) 専門書での学習(3/10 : 30%)
 - ・克服手段実行(1/10 : 10%)
 - ・克服手段未実行(2/10 : 20%)
- (イ) 学校ボランティア(6/10 : 60%)
 - ・克服手段実行(3/10 : 30%)
 - ・克服手段未実行(3/10 : 30%)
- (ウ) ディケア施設でのアルバイト(1/10 : 10%)
 - ・克服手段実行(1/10 : 10%)

イ) 教材研究・計画 (区分 1-2 a)

- (ア) 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト(6/23 : 26.1%)

- ・克服手段実行 (6/23 : 26.1%)
- (イ) 現場実践 (3/23 : 13.0%)
 - ・克服手段未実行 (3/23 : 13.0%)
- (ウ) より効果的な方法探求を常に意識して行動する (8/23 : 34.8%)
 - ・克服手段未実行 (8/23 : 34.8%)
- (エ) 書物や研修セミナー参加等いろいろな場面で勉強する (6/23 : 26.1%)
 - ・克服手段未実行 (6/23 : 26.1%)

ウ) 指導態度・技術 (区分 1-4 a)

- (ア) 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト (16/36 : 44.4%)
 - ・克服手段実行 (16/36 : 44.4%)
- (イ) 現場実践 (3/36 : 8.3%)
 - ・克服手段未実行 (3/36 : 8.3%)
- (ウ) より効果的な方法探求を常に意識して行動する (12/36 : 33.3%)
 - ・克服手段未実行 (12/36 : 33.3%)
- (エ) 書物や研修セミナー参加等いろいろな場面で勉強する (2/36 : 5.6%)
 - ・克服手段未実行 (2/36 : 5.6%)
- (オ) 学校見学 (2/36 : 5.6%)
 - ・克服手段未実行 (2/36 : 5.6%)
- (カ) 身近に障害のある子どもがいるので日常のかかわりで学習する (1/36 : 2.8%)
 - ・克服手段実行 (1/36 : 2.8%)

エ) 児童・生徒理解 (区分 2-2 a)

- (ア) 学校ボランティア・サポーターとしてのアルバイト (10/18 : 55.6%)
 - ・克服手段実行 (9/18 : 50%) ・克服手段未実行 (1/18 : 5.6%)
- (イ) 日常生活で障害児と積極的にのかかわっていく (2/18 : 11.1%)
 - ・克服手段実行 (1/18 : 5.6%) ・克服手段未実行 (1/18 : 5.6%)
- (ウ) より効果的な方法探求を常に意識して行動する (2/18 : 11.1%)
 - ・克服手段未実行 (2/18 : 11.1%)
- (エ) 書物や研修セミナー参加等いろいろな場面で勉強する (2/18 : 11.1%)
 - ・克服手段未実行 (2/18 : 11.1%)
- (オ) 研究 (卒論) (1/18 : 5.6%)
 - ・克服手段未実行 (1/18 : 5.6%)
- (カ) 未記入 (1/18 : 5.6%)

③ 設題-3

Table 4は、今年度の自己の特支教育実習を振り返って、特支教育実習研究における事前指導に追加して取り上げてほしいとあった内容を示したものである。追加して取り上げてほしいものがあるとした学生は、66名中の8名（12.0％）であった。具体的提案内容として「指導案の作成」と「ダウン症児に対する教育的対応」であった者がそれぞれ2名、「具体的指導方法」「肢体不自由について」「職業指導について」「模擬授業の実施」を追加して取り上げてほしいとした学生がそれぞれ1名ずついた。残りの58名（88.0％）は、追加して取り上げてほしいものがないとしていた。

Table 4 特支教育実習研究（事前指導）で追加指導してほしい内容

要望の有無	人数	割合（％）	具体的提案内容と人数
要望あり	8	12.0	・指導案作成（2） ・ダウン症児に対する教育的対応について（2） ・具体的指導方法（1） ・肢体不自由について（1） ・職業指導について（1） ・模擬授業の実施（1）
要望なし	58	88.0	

備考：具体的な内容の（ ）内の数字は、当該内容について要望した人数である。

（5）考察

① 学習の成果と課題について

「振り返りシート」の設題-1で求められた特支教育実習における自身の学習の成果と課題（Fig. 4 参照）については、児童・生徒の理解（区分2-2a）に分類される内容と指導態度・技術（区分1-4a）に分類される内容において、それぞれ約2名に1名（60.6％、53.0％）の学生が学習の成果が得られたと自己評価をしていた。教材研究・計画（区分1-2a）に分類される内容においては、約3名に1名の割合（30.3％）で学習の成果を得ることができたと自己評価をしていた。これらのことは、特支教育実習を通して児童・生徒の理解（区分2-2a）、指導態度・技術（区分1-4a）、教材研究・計画（区分1-2a）の3事項に分類される内容に関して、多くの学生が学習の成果を自覚することができたことを示唆していると考ええる。

また、自己の課題として記述されていた内容（Table 3 参照）は、値に違いはあるものの、学習の成果があったとする前述の3事項と同様の3事項[児童・生徒の理解（区分2-2a）、指導態度・技術（区分1-4a）、教材研究・計画（区分1-2a）]に分類されるものが、他の8事項よりも多くあり、記述者の人数差も大きかった（3事項：延べ77名、他の8事項：延べ15名）。これらのことから学生の課題設定の傾向は、特支教育実習において学習の成果としなかったものを課題として設定するというよりも、学びの成果をさらに深化・拡充することを目指すことを課題として設定する傾向があると推察される。この傾向の存在は「学習の成果をより向上させたい」ということを課題設定の理由（Table 3 参照）としている学生が、3事項あわせて36

名（36/66：54.5%）いたことや「4月から自信をもって教壇に立つために必要（2名）」という理由を述べている学生がいたことから推測することができる。

② 克服手段について

克服手段については、10名以上が自己課題として取り上げた4事項において「学校ボランティア・サポーター（特別支援学校や特別支援学級の支援員）のアルバイト」を克服手段としてあげている学生が最も多かった〔基礎学力・知識（区分1-1a）が60%、教材研究・計画（区分1-2a）が26.1%、指導態度・技術（区分1-4a）が44.4%、児童・生徒の理解（区分2-2a）が55.6%〕。この克服手段は実践を通して課題を克服していこうとする学生の意志の現れと考えられ、これに「現場実践」や「ディケアでのアルバイト」及び「日常生活の中で身近にいる障害児と積極的にいかかわっていくこと」を加えると、教材研究・計画（区分1-2a）を除く3事項においては、半数以上〔基礎学力・知識（区分1-1a）が70%、指導態度・技術（区分1-4a）が55.5%、児童・生徒の理解（区分2-2a）が66.7%〕の学生が実践を通して課題克服を目指していることが推察される。

また、この「学校ボランティア・サポーター（特別支援学校や特別支援学級の支援員）のアルバイト」については、事後指導の段階では既にも実施している学生がほとんどであり、4事項においては延べ38名中4名のみ未実施であった。一方「より効果的な内容のものを常に考える（延べ22名）」「書物やいろいろな場面で勉強する（延べ10名）」というように方向性を示しているものの取り組みの具体性が示されていないものについては、すべて未実施であった。これは橋村ら⁸⁾が「幼稚園教育実習後の自己評価を分析し、課題に対する具体的手立てについては、解決への方向を示すだけで、取り組みに対する具体性に欠ける場合、次回の実習への準備としての取り組みが想定できない状況にある。（筆者要約）」と指摘していることから考えると、事後指導時において、課題解決に向けての取り組みが具体性に欠ける場合、有効な取り組み方法が発見できるような支援が必要であることを示唆していると考えられる。しかし、特支教育実習研究の事後指導は、本学では4回生の12月に実施される2コマ（90分授業2回）であることを考えると、自己評価の分析後に授業として関わり合いを持つことは、極めて困難である。したがって、同時期に開講される教職実践演習の一層の活用を模索することも必要であると考えられる。教職実践演習は「（略）学生が将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ること（略）」⁹⁾を科目の趣旨としているので、この授業の中で課題解決の具体的取り組みを明確化していく活動を支援していくことも有効な支援方法と考えられる。

③ 事前学習に追加することが望ましい内容

本年度実施された特支教育実習研究事前指導において、実習の「事前」の準備として、追加してほしいものは、Table 4に示した通り、「なし」とした学生が88%であった。この結果を見ると事前指導の内容は、学生の満足度が高いものと判断できるが、特支教育実習については実習

準備に関する提案が自己の利益となり難い最終の実習ということを考えると、88%のすべての数値が学生の満足度を反映しているとはいいいがたい。したがって12%の学生における提案内容は、実習準備に不足していた内容と考えられ、これらの対応がより学びある特支教育実習につながると思う。12%の学生における具体的提案内容を分析すると、事前指導で総括的に扱う内容というよりも、各障害種別の指導法に代表される特別支援教育に関する専門科目を履修して学習することが効果的である。本学において、特支教育実習の実施資格を得るためには、「人権（同和）教育」を含めた各種障害教育関係科目から6科目の合格を必要とする。したがって、特支教育実習を依頼する段階から、実習予定校在籍児の障害種等を意識し、当該障害種にかかる専門科目から優先的に履修するようガイダンスしていくことも特支教育実習研究事前指導の学習効果を高めることにつながると考えられる。

3) 総合考察

① 特支教育実習での学びの現状について

第一研究における自己成績評価の分析から、児童・生徒理解（区分2-2）と勤務態度・熱意（区分3-1）の内容については、ほとんどの実習生が、期待した目標まで学習を深めることができたとして評価していると考えられた。一方、基礎学力・知識（区分1-1）、自立活動への理解と指導（区分1-3）、指導態度・技術（区分1-4）、指導の配慮・技術（区分2-3）の計4事項については、約1/4の実習生が期待した目標まで学習を深めることができなかったと評価していると考えられた。また、第二研究における「振り返りシート」の記述内容の分析から、特支教育実習での学びの成果として、約1/3～約3/5の実習生が児童・生徒の理解（区分2-2a）、指導態度・技術（区分1-4a）、教材研究・計画（区分1-2a）の3事項に分類される内容に関し、学習の成果を自覚することができたと考えられ、一方、学習の自己課題として、約1/4～約1/2の実習生が児童・生徒の理解（区分2-2a）、指導態度・技術（区分1-4a）、教材研究・計画（区分1-2a）の3事項に分類される内容を学習の課題として自覚することができたと考えられた。第一研究と第二研究の考察結果から、ほとんどの実習生が「児童・生徒理解（区分2-2）・（区分2-2a）」の事項にかかることについて、特支教育実習で期待した学びをすることができたとして評価していると考えられる。

また、実習生における学習の自己課題は、第一研究と第二研究とは共に授業づくりに関連の深い事項であることが推測された。一方、実習校評価の分析から、実習校の教員は11事項全てにおいて、ほとんどの実習生の学びが、満足できる水準にあると評価していて、ここからは実習生における学習の自己課題の存在は認められなかった。この評価の相違は、第二研究における「振り返りシート」の内容の分析結果である「課題設定の理由」から推測する実習生の評価基準と依頼された評価基準である実習校評価の違いの影響によるものと推測される。すなわち「学習成果をより向上させたい」や「4月から自信をもって教壇に立ちたい」という理由に

代表されるように、卒業を間近に控え教職に就いた自分を想定して評価をするだろう実習生の自己評価と依頼された規準で教育実習期間中だけの評価を行う実習校評価との違いによるものと推察される。実習生の教育実習における自己課題は、学習が深まらなかった内容というよりも、教育実習での学びによって向上した実践力が、現職教員の実践力の水準には到達していないことを認識し、学びの成果をより向上させることを自己課題とする傾向が顕著であることが伺える。教育実習を行う趣旨・目的として「将来教員になる上で、何が課題であるのかを自覚する機会として」⁹⁾ という内容がある。このことを考えると、学びの成果として認識できたものだけが学びの成果ではなく、自己課題を認識したこともまた学びの成果と言える。したがって、今回の教育実習においては学びの多い実習であったと考察できる。

② 特支教育実習の学びを深めるための課題

卒業年次に行われる特支教育実習においては、認識できた課題を解決するために、克服手段を考えそれを即実行することが、学びを深めるために求められる。しかしながら克服手段の構築と具体的行動の支援については、2コマ（90分授業を2回）の事後指導だけでは不十分である。第二研究で考察したように具体的行動がない学生については、近接の趣旨・目的をもった教職実践演習の一層の有効活用を模索することも必要である。この場合、特支教育実習事後指導で作成する「振り返りシート」を教材として提供するなどして、授業間の連携を図ることも有効な方法と考えられる。

特支教育実習を行うことができる特別支援学校は、学校教育法施行令第22条3に規定されている障害種別や障害の程度である者を就学対象としている。したがって、基礎免実習校と異なり、在籍児の障害種や障害の程度・発達の程度も学校や学級によって異なる。教育課程の類型も「準ずる教育課程」「下学年・下学部適応の教育課程」「知的障害適応の教育課程」「全科・統合の教育課程」「自立活動を主とした教育課程」と多種用意されている。当然のことながら6コマ（90分授業を6回）の事前指導で総括的に扱う内容だけでは不十分である。本学では障害種別に特別支援教育に関する専門科目が用意されている。したがって、特支教育実習を依頼する段階から、実習予定校で実習を行う場合に必要となる専門科目から優先的に履修するよう学生に意識化させておくことも特支教育実習研究事前指導の学習効果を高め、特支教育実習の学びを深めることにつながると考えられる。当面は特別支援学校教諭免許取得希望者に対するガイダンスの重要伝達事項の一つとして位置付け、学生の意識を高めることが課題となる。

第一研究と第二研究における実習校評価と実習生の自己成績評価・自己評価の分析結果は、ほとんどの実習生が「児童・生徒理解（区分2-2）・（区分2-2a）」の事項にかかることについて、期待した学びをすることができたことを示唆するものであった。

この結果は、八木⁵⁾ 松本⁷⁾の研究結果とあわせて考察すると、基礎免実習研究事後指導における教育実習の自己評価とそれを教材として活用する特支教育実習研究事前指導との連結学習の効果を伺わせるものでもある。今後の課題としては、他の事項にかかる学習の深化を目指す

して、基礎免実習研究事後指導の内容と特支教育実習研究事前指導の内容との一層の連続性強化の方法について検討することがあげられる。

3. まとめ

本研究は、特支教育実習の学びをより高めることに資するため、2016年度の本学学生における特支教育実習の学びの現状と課題を把握することを目的とした。研究は、実習校教員によって評定された実習生の成績評価とその成績評価と同様の着眼点で実施する実習生の自己成績評価を比較し、学びの現状について把握を図る第一研究と、特支教育実習研究の事後指導で実施された「振り返りシート」の記述内容を分析し、実習生の学びと自己課題について把握を図る第二研究の二つの研究で構成された。その結果として、2016年度の特支教育実習における学生の学びは総じて高いものであった。このことは認識された学習の成果と卒業年次に実施される最終実習特有の課題の自覚から推察された。

あわせて特支教育実習における学びのさらなる向上を目指すための検討事項が今後の課題として3点示唆された。

- ①課題克服に向けて具体的行動がない学生については、近接の趣旨・目的をもった教職実践演習の一層の有効活用を模索することが必要であること。この場合、特支教育実習事後指導で作成する「振り返りシート」を教材として提供するなどして、授業間の連携を図ることも有効な方法と考えられる。
- ②特別支援学校教諭免許取得予定者については、遅くとも教育実習を依頼する段階から、実習開始時期までの間に実習校の実情に応じた専門科目の履修を優先的に行うよう意識化させること。
- ③基礎免実習研究事後指導の内容と特支教育実習研究事前指導の内容との一層の連続性強化の方法について検討すること。

注記（文献・資料）

- 1) 佛教大学 2016年度版 教育実習のしおり【通学課程】
- 2) 佛教大学HP 2016 教育学部教育学科シラバス（特別支援学校教育実習）（特別支援教育実習研究）
<http://www.bukkyo-u.ac.jp/faculty/education/education/curriculum.html>
- 3) 古屋野素材 1988 教育実習に関する実習生の自己評価と実習校における成績評価の関係について -その(1)- 明治大学教職・社会教育主事課程年報, 10, 39-43.
- 4) 柴田俊和・古川雅里子 2009 教育実習における学生の学びと自己評価の現状と課題 びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 6, 157-173.
- 5) 八木義人 2011 教育実習における中間自己評価の有効性 -教育実習生のアンケート調査を手がかりに- 大阪教育大学紀要 第IV部門, 59(2), 229-240.
- 6) 村松和彦 2013 教育実習における学生の自己評価と附属教員による評価をめぐる諸様相 宇都宮大学教育

学部紀要、63(1), 241-251.

- 7) 松本大輔・川上貴・佐藤範男・松井克行 2014 小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の相違に関する検討 西九州大学子ども学部紀要, 5, 71-77.
- 8) 橋村晴美・塚本恵信 2018 幼稚園教育実習事後指導における自己評価から見た学生の現状と課題－課題克服への具体的手立ての記述から－ 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 602.
- 9) 文部科学省 2006 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm 2017/2/19取得

教育実習成績報告票（特別支援学校）

京都地区大学教職課程協議会
(公印省路)

实 习 生		学 籍 号	氏 名
大 学 名	学 部、学 科、专 攻 研 究 科、专 攻		

実習期間		出席すべき日数		欠席した日数		遅刻		早退	
月	日から	日	日	日	日	日	回	回	回
月	日まで						遅刻		早退

区分	事項	(主 な 着 眼 点)	評 価
学 習 指 導	基礎学力・知識	ことが明瞭で、文字が正しく書け、意図的な知識・学力を有しているか、など。	A B C D
	教材研究・計画	教科・単元の研究や準備・計画に努力し、その提示や指導の方法に創意工夫をこらそうとしたか、など。	A B C D
	自立活動への理解と指導	自立活動の意義を理解し、いろいろな態度で配慮して指導しようとしたか、など。	A B C D
生 活 指 導	指導態度・技術	個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態・特点をあてはめ、適切な指導・援助を行ってきたか、特別に必要と認められる児童・生徒に対するきめ細やかな指導・援助を行ってきたか、など。	A B C D
	個別・集団指導	個々の児童・生徒および発達集団の特徴を見直し、全体的な生活を指導して個別・集団指導に効果を生じ、全学的な達成・生活における役割・集団指導に効果を発揮したか、など。	A B C D
	児童・生徒後援者指導書の配置・技術	児童・生徒の中にどこへどこへ、個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態・特点をあてて、関心・要求・喜びなどをよく理解しようとしたか、など。	A B C D
実 習 指 導	指導の配置・技術	児童・生徒に具体的な経験の場を設定し、集団活動への参加を促進したか、など。	A B C D
	勤務態度・熱意	勤務態度がよく、教育的热意を見られたか、など。	A B C D
	事務・実務能力	学校経営上必要な業務が見られたか、など。	A B C D
教 育 的 現 野	レポートなどの物	レポートなどの事務資料などがうまくできているか、など。	A B C D
	レポーター	レポーター・研究者・専門家・審判員などを主題に即時的様子を伝えること、取材をつつて集めたもの、など。	A B C D
	教育的視野	児童・生徒の成長に基づき、主体的・積極的に学習を進めようとする意識、など。	A B C D

説 明	A	B	C	D
実習生として努力と実習に著目して、左欄のいずれかに○印をつけてください。				
A(優)：良く努力し、実習の果をあげることができた。 B(良)：努力し、実習の成果はあった。 C(可)：いさ少しの努力と実習の成果が望まれる。 D(不)：全く努力に欠け、実習の成果は認められなかった。				

特記事項		英 習 校		英習指導教員氏名	印
		学 校 名	学 校 長 氏 名		

備考 1. 本票の使用については、裏面の『教育実習成績報告票』の使用にあたって』をご参照ください。
2. 本票は『教育実習簿』と同時のうえ、ご送付ください。

1. 本展の「教育実習成績報告書」は、裏面の「回封のうえ、ご送付ください。」

京都地区大学教職課程協議会統一様式

「教育実習成績報告票」の使用にあたって

1. 「教育実習成績報告票」について

「教育実習簿」及び「教育実習成績評価票」については、各大学の教職課程の実状に応じて、様々な形態がみられます。一方、教育実習を受け入れていただく学校や当該教育委員会により形式は決められてはいる所も多くなっています。しかし、「教育実習成績評価票」については、必ずしも決まらずに、さまざまに望まれるものであります。

そこでは、京都地区大学教職課程協議会（以下、「京教協」）は、昭和49年4月以来、「評価票」の統一様式作成に向けて京都市教育委員会、現場教職員代表等との合同協議を重ね、昭和50年度より、京教協で合意をみた新しい統一様式様式である「教育実習成績報告票」を採用するにいたしました。内容

- (1) 限られた実習期間中に、公正な評価が可能なもの。
- (2) 煩雑でないもの。
- (3) 教育実習生にはげみになるもの。

その後、幾度かの改訂を経て、現在にいたっております。

2. 「教育実習成績報告票」の使用にあたって

京都地区大学教職課程協議会が統一形式を作成したのは、加盟大学に於いて評価の観点をわかりやすくすること、あわせて実習生にとってはより具体的な実習目標ともなるよう配慮したためです。すなわち、実習生がこの着眼点に示された目標に向かって努力することによって、望ましい教育実習の効果をあげ、実習生が自己目標としたものです。

なお、「教育実習成績報告票」は、あくまで京都地区大学教職課程の加盟大学におけるガイドラインの点を確認したいという、教習生自身の評価をいただくことをお願いします。

3. 「教育実習成績報告票」についての補足説明

- 1) 事項別評価
事項別評価については、詳しい説明は省略しますが、各着眼点を十分留意したとき、実習校の実状に即して指導・評価していただくようお願いいたします。
- また、「教育的視野」の項目においても実習生として大切な側面だと考えられていますので、教師集団とのさまざまなかかわりをおしえて配慮していただくようお願いいたします。
- 2) 総合評価
この欄は、「事項別評価」の算定を平均としてではなく、10項目の中に含み得ない一般的内容も加味される、総合的に評価していただくことを希望します。
- 3) 障がいのある実習生の評価について
障がいのある実習生の評価については、当該学生の障がいの種別・程度が様々であるため、文書記載にとりも一部加味して評価していただくようお願いいたします。実習生の所属先までご連絡ください（この件につきましては必要に応じて、実習生の所属先までご連絡ください）。

教育実習（特別支援学校）自己評価票

学部・学科	学籍番号	氏 名
-------	------	-----

1. あなた自身の教育実習を振り返って、該当する評価を以下の表の評価の欄に○印をつけてください。評価は次のことを目安にしてください。
A：(優) 非常に満足できる内容であった、B：(良) 満足できる内容であった、C：(可) いま少しの努力することが必要な内容であった、D：(不可) 全く満足できる状況になかった

区分	事 項	主な着眼点	評 価
学 習 指 導	基礎学力・知識	ことばが明瞭で、文字が正しく書け、基礎的な知識・学力を修得することができたか。	A B C D
	教材研究・計画	教材・教具の研究や準備・計画に努力し、その提示や指導の方法に創意工夫をすることができたか。	A B C D
	自立活動への理解と指導	自立活動の意義を理解し、いろいろな場面で配慮して、指導することができたか。	A B C D
	指導態度・技術	個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、細心に対応し、到達目標を明らかにして、弾力的に指導しようと配慮・工夫することができたか。	A B C D
生 活 指 導	個別・集団指導	個々の児童・生徒および学級集団の特質に注目し、全学校生活を通じて個別・集団指導に熱意を示し、努力することができたか。	A B C D
	児童・生徒理解	児童・生徒の中にとけこみ、個々の児童・生徒の障害・発達・生活実態に視点をあてて、願い、要求・喜びなどをよく理解しようとすることができたか。	A B C D
	指導の配慮・技術	児童・生徒に具体的な経験の場を設定し、集団活動への参加を促進することができたか。	A B C D
実 習 態 度	勤務態度・熱意	良い勤務態度で、教育的熱意を示すことができたか。	A B C D
	事務・実務能力	学級経営上の事務処理など適切に行うことができたか。	A B C D
	レポートなどの提出物	レポート・実習簿・研究物・書類などを主題に即時的確に記述し、期限を守って提出することができたか。	A B C D
	教育的視野	児童・生徒の実態に基づき、職場・家庭・地域などの様子の理解に努め、自主的・協力的に教育を進めることができたか。	A B C D

2. 今回の教育実習（特別支援学校）で最も役に立った大学の授業はどんな科目でしたか(科目名：)
3. 今年度の事前指導の内容以外で、取り上げてもいいことがありますか。該当するところに○をつけ、必要に応じて具体的に記入ください。
①ない、②ある（具体的内容：)